



静岡産業大学 学長
三枝 幸文

さえぐさ・ゆきふみ氏

1945年生まれ
1972年 慶應義塾大学大学院修了
1994年 静岡産業大学経営学部助教授
1998年 経営学部教授
2002年 経営学部長
2012年 学長に就任

専門分野は資産評価論、財務諸表論、土地評価論
所属学会
日本経営診断学会、日本不動産学会、日本土地環境学会

スピーディな意思決定でイノベーションを起こしたい

本学は1994（平成6）年、静岡県磐田市と学校法人第二静岡学園（現、新静岡学園）との公私協力方式により開学しました。当初より静岡の「県民大学」たることを高らかに宣言し、静岡県や磐田市、藤枝市といった地域社会の発展に寄与する人材の育成や、知識・情報・アイデア・新産業の創造に積極的に取り組むことを約束しています。静岡県は大学進学者の3／4が県外に流出する地域。残った1／4の若者がいかにこの地の発展に貢献できるようになるか、それが地域の課題であり、本学の大切な使命でもあるのです。

そうした本学のスタンスに共鳴してくださる企業や団体が数多くの「冠講座（寄付講座）」を開講しています。協力関係にある県や市、Jリーグの「ジュビロ磐田」をはじめ、製造業、銀行、電力会社、広告代理店、ロータリークラブなどが提供する寄付講座が約20。形だけの「冠講座」ではなく、全15回2単位の正規講座として、きっちり授業をしていただいています。先方に金銭的見返りはなく、地域の若者を育てたいという熱意のみに支えられてきたものといえます。これほどまでに恵まれた寄付講座を毎年20も開講している大学は、ほとんど類を見ないのではないのでしょうか。昨年、「冠講座」がスタートして10周年を迎え、シンポジウムを開くとともに、感謝の会を開催させていただきました。誠にありがたいことです。

学生とじっくり向き合う「大化け教育」

本学の教育の最大のキーワードは、「大化け教育」です。地元では「オパケスイッチで大化け！」というキャッチフレーズでかなり浸透してまいりました。人は誰でも、優れたもの＝可能性の種を持っています。その種が芽を出し花開く、すなわち「大化け」するには、スイッチが入らなければなりません。何がきっかけでスイッチが入るかは人それぞれ違うため、そのきっかけとなり得る場を大学が数多く提供しようというのが「大化け教育」の真意です。

まず授業は極力分かりやすく、学生をやる気にさせる工夫を取り入れることを全学挙げて推進しています。「ティーチング・メソッド」と称し、各教員がその開発・充実を進めていくように、01年から毎年ティーチング・メソッド研究会を開催。「学生が選んだベスト・ティーチャー賞」も表彰しています。近年はそれをさらに進め、「ラーニング・メソッド（学習者本位の教授法）」の研究にも取り組み始めています。

授業の枠を超えた「体験型学習」の場も豊富に用意しています。スポーツ、デザイン、ビジネスの各分野で社会とつながる「アカデミー」を設置し、そのなかで例えば地域の子どもたちにスポーツや芸術、デザインなどを教える「キッズスクール」を開講したり、学内外の作品展をプロデュースする「デザインアカデミー」を開講。学生に積極的に参加してもらっています。

また、「公務員大化け道場」という公務員対策講座をスタートしました。地方公務員試験に特化した対策講座を行い、正課授業ともリンクさせ、単位としても認定。このようにあらゆる学びを学生の「大化け」につなげようと一貫させています。

今後は「やらない」ことがリスクになる

本学の経営スタンスを一言で表すならば、それは大坪前学長時代から続くことですが、やるべきことは何ら「民間企業と変わらない」ということです。大学も環境変化にダイレクトに影響を受け、当然のこと浮き沈みはありますし、最悪の場合、倒産もあり得る。そのつもりでこれまでも経営してまいりましたし、今後も変わることはないでしょう。

経営において大切にしていることのひとつは「スピード」です。経営環境の変化にできるだけ「早く」気づき、「早く」意思決定し、「早く」行動する。それが肝心と考えています。構成員がある程度同じ方向を向いている組織でなければ、こうしたことは不可能です。そのための土壌づくりが何より重要です。例えば本学では、

毎年4月に学長が具体的な方針を打ち出します。それに基づいて学部長や事務局長といった現場のトップが自らの方針を定めます。それを受けて続くメンバーが自らやるべきことをまとめておきます。各々がそれらの書面に時おり目を通し、自ら決めたことを実践できているかどうか確認してもらっています。

また、教員組織のなかに各種委員会があるのですが、その委員長や、事務方の管理職には毎月業務報告書を提出してもらっています。それを全ての教職員が共有することで、外部の経営環境が今どう変化しているのか、それに対して内部のどの組織がどのように対応しようとしているのかがリアルに把握できます。これはすばやい意思決定に大変役立っています。

さらに、職員対象のマネジメント研修を数多く実施したり、職員からの提案を奨励する「一善一改革」運動を推進するなどSDにも力を入れています。

学生減少の時代にあって、こちらが何も行動を起こさなければ学生が減っていくことは目に見えています。すなわち、何かをすれば常にリスクがつきまといいますが、しないことのリスクも大いにある時代だと言えるでしょう。従って常に行動をしていかなければなりません。教職員各々の努力により、それが可能な組織に少しずつ成長してきたと感じています。

地域貢献についても、本学では個々の教員やゼミナールの取り組みとしてではなく、大学全体の取り組みとして、スポーツ産業やコンテンツ産業の発展に寄与することを目的に活動をしてきました。この地域貢献というミッションをさらに推し進めるために、以前からある研究所・研究センターを包括した「静岡産業大学総合研究所」を創設しました。また、学園は「第3次創業」という信念をもって「新静岡学園」として生まれ変わりました。私たちはこれからも、社会にもっと多くのイノベーションを巻き起こしていきたいと考えています。

